

天台大師教學の綱要

関 口 真 大

一

「五時八教は天台教判に非ず」という題目をかかけ、昭和四十七年度の印仏学会学術大会で、今後の仏教学界から

一、五時八教を天台大師が立てたものであると説くこと、
二、一般仏教、仏教教理史、各宗綱要の講述に際して五時八教を綱要として天台教學を紹介し講義すること、の風潮をとともに絶ち切つていただきたい、と要請した。

爾来それが「五時八教廃棄論」などと呼ばれ、それに対し、賛否の論や疑義が各方面から提起されて来た。これらのうち代表的な疑義は印仏研四六の

関口博士の五時八教廃棄論への疑義 佐藤哲英・浅田正博である。それに対して、私から印仏研四七に

天台教相論について——佐藤博士の疑義に対する疑義を呈し、印仏研四七で

天台五時八教論について——関口博士の疑義

天台大師教學の綱要（関 口）

二十五カ条に対する回答——佐藤哲英

をいただいた。今回はその疑義と回答とを対照せしめたいのではあるが、その双方の全文を掲載することは限られた紙数ではとうてい不可能であるから、その大体は、大正大学研究紀要六二輯に掲載した

天台教相論についての論争の経過と結末
にゆずつておく。そしていまは、それらの問答からさらに一歩を進めた問題を提起しておきたい。

二

従来の間答往復を見て、

一、天台三大部をはじめ天台大師のいかなる選述にも「五時八教」という言葉はない。

二、同じく天台大師には「化儀四教」「化法四教」乃至「化儀・化法」という用語もない。

三、天台大師には五時八教と呼ばれ得る組織によつて教相

または教判を述べているところもない。

四、五時八教とは後世に下つてのシナ天台における所産である。

などの諸点においては、佐藤博士も全く私と所見を同じうして来られたようである。しかしながら、佐藤博士は、けれども私は五時八教を天台大師の思想をうけついで形成された教判だと考えていますので、五時八教と形成されてくる思想の根源まで天台大師になかったとは考えていません。随つてに確かに貴説には賛成いたしかねます。

といい、また、

さて五時八教は後世天台宗の教學として大成されたものですから、直ちにこれを「智顗教學」（博士の天台學）にあてはめることは少し無理でしょう。

といつてゐる。五時八教は天台大師が説いた教判であるとして露ほどもそれを疑わなかつた従来の常識からいへば、これだけでもすいぶん人を驚かすに足る重大な発言である。したがつて次には、

天台大師に「五時八教」の言葉がないことは、これらの用語が一つの組織としてまだ充分形成されていなかつたからでしょう。

といい、さらには、

天台大師の偉大な思想体系は、その前期から後期にかけて飛躍的進展を見せました。けれども六十年の生涯中にはなお未完成部分

もいくらかは残されたものがあつたと考えており、この五時八教も未完成の教學の一ではなかつたかと思つています。

などといつてゐる。

私をして卒直にいわしめていただければ、私には佐藤博士が、天台大師その人の教學を指して不充分だとか未完成だとか未熟だとか評し得るほどの偉大な學者であるとは思われない。何故にこのような不遜な暴言妄論を敢えてなさるのであるうか。

三

五時八教の内容とされるものについては、

一、五時は、「五時」でなく、「五味」に重点をおいた理解に改められなければならない。

二、化儀四教とされる頓・漸・不定・秘密の四教と、天台大師が法華玄義卷第十、維摩經玄疏卷第六に説いている頓教・漸教・不定教・秘密教とは名同義異、（佐藤博士によれば同名異旨）のものである。

三、化法四教とされる藏・通・別・円の四教は、天台大師自身の大本四教義（維摩經玄疏）に基づいて理解されるべきである。

とする諸点、および天台大師教相論の全体につき、

四、天台大師の教相とならば、法華玄義卷第十の所説を見

るべきである。

五、天台大師の教相論は、經教の勝劣判定が主眼ではなく、全仏教の一仏乗への開会統合が趣旨である。

とすることについても、私の所説にほぼ同意を表されている。

しかし佐藤哲英博士の最後の回答のなかに、

貴師の「天台教相論」を拝見しますと、なお三大部中心の既成觀念の残滓がなにほどこ感ぜられます。われわれは從來の先入觀念のすべてを払拭して、純學術的立場で虚心に天台大師智顗の思想教學を研究すべきです。いわゆる天台教相論の研究もその一環をなすものですが、この場合には五時八教なる先入觀念からの脱皮が必要なのは申すまでもありません。

といっている。從來の先入觀念のすべてを払拭して、純學術的立場で虚心に天台大師智顗の思想教學を研究してこそ天台教相論の研究も成立つという主張は、まさにそのとおりである。この場合、五時八教なる先入觀念からの脱皮が必要だとされることは、私の主張を全く承認されたことである。佐藤哲英博士のごとき天台大師研究の權威者と自他ともに許されている人がこのようにいうことは、私としてはまことに力強いかがりである。

しかるに「三大部中心の既成觀念の残滓」とはなにを意味しているのか、私にはわからない。払拭しなければならぬ先入觀念の一であるという意味であろうが、天台大師の思想

教學を研究するには、虚心に天台三大部を中心とする天台大師の撰述に依らなければならないというのが、私の主張の中心觀念である。それを「三大部中心の既成觀念の残滓」などと評して払拭し去らなければならないようなことをいわれることは、私としてはいかんとしても承服しかねる。

いつたい佐藤博士は天台三大部等を捨てて、何によつて天台大師の思想教學を研究されるのか。そもそも何のために天台大師教學を研究されるのか。改めてうかがいたい。

四

佐藤博士は、法華玄義卷第一と卷第十に見られるところを「一卷教相」「十卷教相」とよび、

天台の教相をば「十卷教相」にすわって見ようとされる貴師の御所見を否定しようなど、私は毛頭考えておりません。

いいながらも、「一卷教相」と「十卷教相」を同等に見るべきだとする。これは從來も「一十教相不同」として、一個の論題になつたことのある問題である。けれども「一卷教相」は五時八教、「十卷教相」が三種教相であるとして、全く異なつた教相を説いているかのごとくに見ることが許されるか否かは大なる疑問である。ことに卷第一に説かれている頓・漸・不定と卷第十に説かれている頓・漸・不定との同異など天台大師自身はすこしも問題にしていない。それを同名

異旨だなどと論ずることは、天台大師その人を精神分裂者のごとくに見ることである。私が名同義異と呼んだのは、五時八教の化儀四教と法華玄義の頓・漸・不定との相異であつて、玄義卷第一と卷第十の間にそれがあるというのではない。私は卷第一と卷第十の所説とはともに同一法華玄義のなかの所説として理解されなければならないはずのものであると考える。一十教相不同などとし、両卷の頓漸不定を同名異旨のものと見ることは許されるべきでない。どうしてそのような不合理な見方が生じたのか。それは天台大師が説いた教相は五時八教であつたとする先入観念のためであるといわざるを得ない。すなわち卷第一が五時八教を説いていると見ることが誤まりの根源なのである。

五

五時八教固執者は、法華玄義卷第十の教相玄義にいわゆる化法四教が説かれていないことを訝ると共に、化儀四教に該当すると思つているものが、三種の教相に終つていふことについて、それは対他的のもので、天台大師の独自の教相義ではないとする。すなわち南三北七等の教判においてすでに説かれていたのが頓・漸・不定の三教であるから、天台大師がそれに準じて三教だけを説いたのであるとする。

けれども周知のごとく法華玄義は名・体・宗・用・教相の

五重玄義をもつて構成されており、第五重の教相玄義がその卷第十に説かれていふのである。しかもその一段は、

一、大意。二、異を出だす。三、難を明かす。四、去取。五、判教。

の五段に分けられている。すなわちその第一の「大意」は教相なるものを扱う大意で、そこに説かれているのは、卷第一上に、五重玄義なるものについて總体的に各々の名義や相互の關係などを示しているいわゆる七番共解のなかに説かれていふもので、教相三意といわれ、教相を判釈する場合の基本的意義原則についての理解の仕方である。

第二項の「異を出だす」ではいわゆる南三北七の諸家の教判を列記し、第三項の「難も明かす」でそれら諸家の教判に対して一一に嚴密な批判を加え、第四項の「去取」においてそれらの批判検討の結果、南三北七の諸教判のなから取つて用うべき部分と捨てて用うべからざる部分とを明らかにし、このような充分な準備のちについて第五項の教相にいたつてはじめて大師自身の教相論を述べていふのである。その大綱が三種教相である。

しかもこの三種の教相を説くについて、初めに

今、此の三教を釈するに、各、二解を作す。一には教門に約して解し、二には觀門に約して解す。

として三教に対する教門觀門からのそれぞれの解説をなし、

教門は、信行の人のためにまた聞の義を成じ、観門は、法行の人のためにはまた慧の義を成す。いま信法の兩行を弁じて化法を明かすに、おのおの三意を作す。前の諸教に経て、一科として諸の法師に異ならざることあることなし。もし修禪学道せんと欲するに、前の諸觀に経て、法行の人のために安心の法を説き、一科として世間の禪師と同じきものあることなし。

とまでいつて、自分の教相論の特殊性を強調し、

これを略して教觀の大意を点じ、大いに仏法を該うと名づく。といつてゐる。「大いに仏法を該う」は荊溪湛然が「一化に該通す」と注しているように仏一代の教化を罄くして尽くさざるものはない意味である。すなわちわれわれは天台大師の教相判釈の大綱、教觀二門の綱要は、ここにこそそれを見るべきであり、ここに説かれてゐるところ以外にそれを考えるべきではない。

此の三、名は旧に同じきも、義は異なる。

と説明している所似は、天台大師自身が説いている頓教・漸教・不定教の三教が華嚴經を頓教とし、阿含・方等・般若・法華・涅槃の五時を漸教とし、勝鬘經等の部類を偏方不定教とした旧来の頓・漸・不定の三教の理念とは全く異なるものであることを明らかにしたものである。したがつて天台大師は、頓教を説くに当つて、華嚴經のほか、法華經・涅槃經・維摩經・小品般若經の句などに依つて頓教と名づけられる教

相を示し「諸大乘經の、此の如き類例を、皆、頓教の相と名づく、頓教の部には非ず」と結んでゐる。ここに頓教の部に非ずといつてゐるのは、華嚴經だけを頓教とする頓教を否定する意味である。それは南三北七の旧教判における頓教の觀念の否定であるが、同時に同じく「頓教とは華嚴經なり」という五時八教のなかの頓教の觀念もまた否定されてゐるのである。また天台大師が説く漸教とは、四教五味の全般にわたつて次第に調熟する漸教なのであつて、これは

漸教の相にして、漸教の部に非ず。

といつてゐるように、阿含・方等・般若・法華・涅槃の五時を漸教とした旧教判の漸教の觀念の否定である。

すなわち天台大師教相論においては、漸教から華嚴經、華嚴時を除外してはならない。漸教からいへばそれは擬宜のための教であり、座にあらでも聲のごとく啞のごとくであつた二乗も、やがて誘引・彈呵・淘汰、開会によつて乳・酪・生蘇・熟蘇・醍醐へと次第に融熟してゆくのであり、また漸とは、藏通別円なり。

といつてゐるように、藏・通・別・円と次第し、析空觀・体空觀・次第三觀・一心三觀と開悟を進めてゆくのが、漸教なのである。したがつて、阿含、方等、般若の三時、三部のみを漸教とする五時八教判の漸教の觀念はなおいつそう否定されなければならない。

これを不定教の相と名づく、不定の部に非ず。

も、同じことであつて、旧來の偏方不定教の部の否定であると同時に、前四時の經典を不定教とする五時八教の觀念もまた許されない。

佐藤博士は、化儀四教が化法四教とともに天台大師にあつたかのごとくにいうけれども、一面では、天台大師の頓・漸・不定・秘密と五時八教の化儀四教の頓・漸・不定・秘密とは、名は同じでも義旨は異なつたことを認めているのであるし、すでに天台大師には「化儀四教」または「化儀・化法」の名義さえもないことを認めているのであるから、天台大師に化儀四教があつたとするのは、甚だしい自己矛盾である。

六

さて、法華玄義卷第十に説かれているのは頓・漸・不定の三種教相であり、維摩經玄疏卷第六に説かれているのは頓・漸・不定・秘密の四教であるが、三教がもとでそれが後に四教に展開されたと見るか、却つて四教が三教に約められたものであるかの問題が残る。私は後者の見方を取る。なるほど維摩經玄疏は法華玄義より後の撰述であるから、その点からいえば三教がやがての四教に展開したとも見られようが、法華玄義においても、卷第一には、五時八教論者が化儀四教の典拠を卷第一の教相に求めようとしているように、そこにす

でに頓・漸・不定・秘密の四教の名が説かれているのであるから、三種教相が説かれる以前に四教があつたことが知られる。すなわち卷第十では、不定教とは顕露不定教、秘密教とは秘密不定教の略称としていのであるから、この二つの不定教を併わせて不定教と称したと見るべきである。また維摩經玄疏卷第六の教相段には、頓漸・不定・秘密の四教の名をつらね。

備さには法華玄義に出づ。

といい、その内容のすべてを法華玄義にゆずっているからである。

さてまた、五時八教固執者は、玄義卷第十は三種教相とし、五時八教の典拠を卷第一にのみ求め、一十教相不同などと称し、卷第十については、

古來議していわく、問う、諸文、一家の判教は、皆、八教に約して五時を判す。此の中には何ぞ化法四教を没し、及び化儀に於て秘密を闕くや。又、頓は則ち教に約し、漸は則ち説の次第に約し、不定は則ち毒発に約して、乃ち通途の頓・漸・不定と其の義同じからざるや。

という疑問を發している。これらは、五時八教がもし天台大師の説いたものであるならば、当然起さなければならぬ疑問である。しかるに法華玄義それ自体においては、その間に何等の説明も加えていない。すなわち天台大師自身において

はそのようなことは問題にならなかつたのである。

七

化法四教について私が主張していたことは、

一、藏・通・別・円の四教は、五時八教などと称し、いわゆる教判のなかに組み入れるべきではない。

二、この四教は、教義または教理として、いわゆる教判とは異なつた次元において学ばれるべきである。

三、この四教は、大本四教義によつて学ばれるべきである。

四、五時八教説ことに諦観の天台四教儀に見る化法四教は、その要略の仕方がきわめて拙劣である。

ということなどである。

藏通別円の四教は、天台大師の説く仏教教理の理解の基礎知識としてきわめて大事なものである。けれども、三大部にはその組織的な解説はない。大本四教義は維摩經玄義の一部である。維摩經は方等部に属する代表的な經典で、四教の「対」説を特色とする。したがつて四教全般についての知識がなければ維摩經の所説は理解できない。これが維摩經玄疏において四教の教義が詳説されている所以である。四教を對比して詳説することは、自から大小偏円の差別を明らかにすることになり、弾偏折小嘆大褒円の彈呵となる。三即一、権即実の一仏乘開會が法華經であるとする天台大師の法華大部

にいまさら大小偏円の差別などが論ぜられるべきではない。また、法華玄義には

当に知るべし、此の經は、唯だ如來の設教の大綱を論じ、微細の綱目を委しくせず。

といつてゐる。大綱としての頓・漸・不定の三教が詳説されるのみで、その一一の内容の綱目を説明するための藏通別円の四教の解説が見られない所以である。

大本四教義を見ると、いわゆる四教四門が重要な位置を占めている。

四教にそれぞれ四門ありとし、藏教においては有門に毘曇宗を、藏教の空門に成実宗を配するなどして、婆沙論と成実論とをならべて藏教の教義を説いている。五時八教説では有門によつてのみ藏教の内容を示し、空門の成実論には一言も触れない。

通途の五時八教論においては、化儀四教は五時と合様してきわめて簡略に叙述し、化法四教の叙述に重点をおいている。これは大綱を忘れて綱目の叙述に走つたものである。また藏教についても婆沙論による名相の紹介にのみ力を入れ、空門と成実論の存在を忘れてゐる。三界六道、見惑思惑、三賢七聖などの詳説をしている余裕があるなら、何故、いわゆる四門の存在について一言もしないのか。甚だしくことの軽重本末を誤るものである。また元來が、四教を説くなら、「四教

は三觀より起る」と定義されているように、四教の教義の基
本として、析空觀・体空觀・次第三觀・一心三觀について明
記すべきである。維摩經玄義を分割別行して四教義十二卷、
三觀義二卷、四悉壇義一卷となつてゐるのである。三觀義を
忘れた四教義は、天台大師教學としてはその本義を失つたも
のである。

八

私の主張はこのようなものであるから、

天台大師に五時の思想があつたことは間違ひありません。

天台大師に化法四教判が確立してゐたことは明瞭です。

などという論議や考証は、すべて無意味であり、全く不必要
なものである。必要なのは、五時八教にいう化儀四教と法華
玄義卷第十、維摩經玄疏卷第六の頓・漸・不定・秘密の四教
とを「同名異旨と見ています」「その名称こそ同一でも化儀
と化法との違いがあります」といい、伝教大師につき「天台
大師から化法と化儀の両面をうけられたようです。随つて
『化法の頓教』などあるからといつて天台への誤解だとは
考えていません」などということについて、それは五時八教
ではどういふ許されないものなのであるから、何によつてそ
ういうのか、何故にそういうのが、明瞭に説明されなければ
ならないのに、その説明は全くない。

『円頓』の教義の説明が回避されているのも、華嚴經のみ
を頓教とする五時八教からではその説明が不可能であつたか
らであろう。同じく阿含・方等・般若の三時三部のみを漸教
とする五時八教からでは、漸次止觀の説明も不可能であり、
不定・秘密の二教を前四時に限れりとする五時八教からでは
不定止觀の意義の説明も不可能であるはずである。同時にま
た円頓止觀の行法とされる四種三昧もまた五時八教からでは
どういふその教義的根柢の説明が不可能であろう。

その他、法華本門を忘れてゐること、教觀二門を兩輪双翼
のごとしとする天台大師教學の觀門の欠除してゐることな
ど、五時八教は天台大師教學の綱要を大きく誤まらしめてい
るものであるといわなければならない。

天台大師教學の研究において大事なことは「五時八教」が
天台大師にあつたか無かつたかなどということよりも、天台
大師が自ら説いたものが何であつたかを明らかにすること
でなければならない。私が天台大師教學の教相たるべきもの
及び天台大師教學の綱要たるものとして「天台教相論」に述
べておいたものに対して充分の関心と批判をねがいたい。